

不登校への類似性認知と行動

○宮本正一
(岐阜大学)
キーワード: 不登校 類似性 共感

Effects of the similarity to non-attendant persons on the empathy
Masakazu Miyamoto
(Gifu University)
Key words: non-attendance, similarity, empathy

目 的

不登校への対応を考えるとき、周囲の者の共感的態度が重要である。この共感的態度が現れる要因として相手との類似性認知が考えられる。本研究はビデオの登場人物に対する類似性認知の効果を実験的に検証する。

方 法

研究対象者 岐阜県内の A 中学校 2・3 年生の生徒、計 8 学級の 245 名とその校区の適応指導教室の生徒 7 名、合わせて 252 名。
ビデオ 登場人物の異なる、視聴時間約 3 分のビデオを 2 種類使用した。ビデオ 1 は優等生だった男子(現在 22 歳)が部活動の野球でつまずいて不登校になっていった様子をナレーションと本人が語っていく内容である。ビデオ 2 はいじめが原因で身体反応が現れ、不登校になっていった男子(現在 20 歳)の様子をナレーションと本人が語っていく内容である。

類似性認知尺度 「性格」「雰囲気」「考え方」「印象」「なんとなく」の 5 項目に対して「似ている、どちらかといえば似ている、どちらかといえば似ていない、似ていない」の 4 件法で回答を求めた。
イメージ 白井（1992）で使用された登校拒否児に対するイメージ尺度から形容詞を一部利用し、SD 方式に変更して使用した。回答形式は意味が対になる形容詞からなる 15 対に対して、「非常によくあてはまる、よくあてはまる、どちらかといえばあてはまる」の 3 項目を対にした 6 件法で回答を求めた。

不登校との関与度 「あなたの身近に不登校や保健室登校、相談室登校の人はいますか」と教示し、「身近にいない(1)、クラス・学校にいる or いた(2)、友人にいる or いた(3)、自分自身を含め家族にいる or いた(4)」から回答を求めた。
手続き 中学校 2・3 年生の学級担任の先生を中心に協力を願い、各学級で調査用紙を配り、放送室から放送で注意事項などを読み上げた。そしてビデオを再生したのち生徒一人ひとりに回答してもらった。調査終了後に質問紙は学級ごとにまとめて回収してもらった。適応指導教室では、個々の生徒に質問紙を配付し、注意事項を読み上げたのち、ビデオを再生した。その後回答を求めた。どちらの調査も実施時間はおよそ 20 分であった。

結 果

類似性認知尺度は、似ている(4)、どちらかといえば似ている(3)、どちらかといえば似ていない(2)、似ていない(1)と得点化し、5 項目の合計を求めた。研究対象者 59%が自分に似ていないと回答していたので類似度低群、残りを高軍とする。
イメージ尺度はビデオ毎に因子分析を行い、どちらも 1 因子解が得られた。ビデオ 1 は 11 項目、ビデオ 2 は 14 項目の平均項目得点を登場人物への「好意度得点」と呼ぶ。

ビデオ 1 について(図 1)、好意度得点を類似度 2 群で比較し、t 検定を行った。類似度高群(n=89, m=2.89)は類似度低群(n=163, m=2.53)より高得点であった(t=4.08, p<.001)。

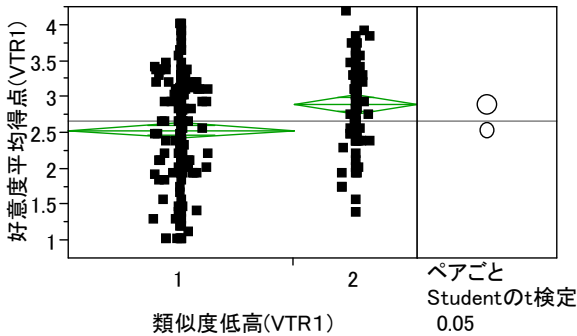


図 1 類似度低高群毎の好意度(ビデオ 1)

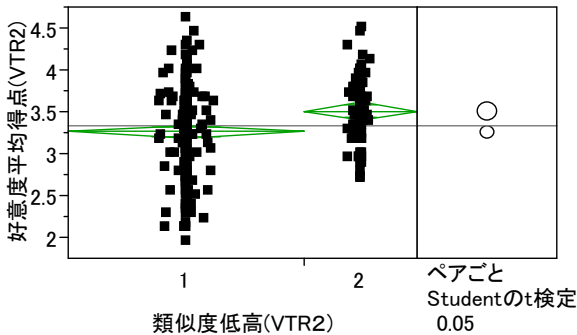


図 2 類似度低高群毎の好意度(ビデオ 2)

ビデオ 2 について(図 2)、好意度得点を類似度 2 群で比較し、t 検定を行った。類似度高群(n=81, m=3.51)は類似度低群(n=169, m=3.26)より高得点であった(t=3.61, p<.001)。

表 1 不登校との関与度と類似度認知

		関与度			
		度数 1	2	3	4
類似度	高	16	125	11	11
	低	9	49	14	4
		25	174	25	15

不登校との関与度と類似度低高群(ビデオ 2)とのクロス集計を表 1 に示した。ビデオ 1 では有意ではなかったが、ビデオ 2 では、 χ^2 検定の結果が有意($\chi^2[3]=8.20, p<.042$)であった。類似度高群には「友人に不登校がいる or いた」と答える傾向が高かった。
ビデオの内容を再検討する必要がある。